

長期縦走

南アルプス長期縦走そして世間

よくそんなに南アルプスばかりに入って飽きないね、と言われることが多い。もちろん、以前はあちこちの山を登ったが、山旅を楽しむためには小さすぎるか不自然な所ばかりだった。町に下り、山をつなげば長くなるが、そのようなぶつ切れ山旅は好きになれなかった。

北アルプスは稜線上で水が得られない所が多く、事実上小屋から水を買わなければ縦走はできない。これでは他力本願すぎ、ノンサポートとはいえないし、短い間隔で現れる巨大山小屋をへつって人混みの中を歩くのも不自然だ。北アルプスは山旅のフィールドとしては、あまりに人工的で面白味に欠ける。飯豊も朝日も小さ過ぎる。

南アルプスは高山かつスケールが大きく、稜線上で水が得られ自然な山旅を楽しめる唯一の地域だろう。どうしても南アルプスに行きたくて行っているのではなく、短い時間に長く自然な山旅を楽しみたいと泣く泣く入っている。

水泳の苦手な者にとって、沢登りは水の恐怖が脳裏から離れず好きになれない。体脂肪率の少ない者には、頭の先までしびれる冷水も、鈍ってふやけた体と精神には刺激が強すぎる。クライミングは取りつきまでのガウ場は恐ろしく、どうしてこんな無理をして岩に取りつかないといけないのかと思うと嫌になる。頂上に行くのに必須ならともかく、日本の山はどこでも歩いて登ることができる。それに、技術の程度によって安全性、楽しみは大きく異なり、トレーニングの嫌いなゲータラ人間に向く行為とは思えない。完全に技術を習得し自分のものとしていない者にとって、少しトレーニングをさぼるとすぐレベルダウンするようでは、楽しめないわけだ。その点縦走は、せいぜい生活技術があれば長期間連続した活動を年齢に関係なくできる。沢登りで3週間連続は無理であるし、岩でも3週間なら定着してそこからあちこちのルートを登ることになる。しかし縦走なら3週間かけて遙か彼方の目的地に向かうという、『ホモ・モーペンス』(黒川紀章、中公文庫、69年)的移動本能を満たしてくれる。所帯道具一切を背負っての連続した歩行活動は、新しい大地を求めて移動した原始人の旅のシミュレートだ。アメリカのトレッキングの舞台は、ガイドブック、ビデオ、雑誌等で見ると限り整備されすぎ、日本の山岳のような変化がなく、2〜3週間程度の日数では楽しむより飽き飽きしそうだ。日本の山岳地帯であれば、アメリカのトレッキングルートよりトレールははるかに悪く、天候にも変化があり、急峻な地形は変

化に富んだ眺めを与えてくれる。そこそこのスケールと急峻さと気候で、夏でも冬でも適度な長期縦走の楽しめる南アルプスは「縮み指向の日本人」の感性にフィットしている。無雪期であれば3倍くらいの大きさは欲しいが、欲は言うまい。

始めて無雪期南アルプス全山縦走を試みた時、あまりに大げさな情報にビビりながら驚くほど簡単にでき拍子抜けした記憶がある。推奨ペースで行くとあっと言う間に次のテン場に着き、毎日ほとんど歩いた気がせず満足できなかった。小屋番に、もっと先まで行けばと言われても、心配して止めてしまっていた。しかし、どの本や、雑誌の記事に書かれていたことは全く異なり、納得できずそれから多少ルートを変え、方向を変え何度もやってみたが、何時も短く、楽すぎると不満でならなかった。本当に小心で自主性がなく、勇気がなかった。

一般にクライミングを好きになれなかった人は、野心家"climber"でも出世主義者"climber"でもない良い人かもしれないが、何かに挑戦するという気迫に欠ける傾向があると思う。上昇志向で立身出世のため努力する(人"climber")ことは、クライマーにしばしば見られる典型的性格であるのと対照的だ。もちろん現在のアルパインクライミングの凋落振を見ると、おっちょこちょいの目立ちたがり屋が多かっただけなのかもしれない。他のスポーツと異なり相当能力の落ちる人でも初登攀という新記録を作ることが可能だったが、未踏のルートがなくなればそれも不可能になり、山の魅力が失われたということだ。

そこで思い切り、鹿塩から入山、三伏から南下して光まで半山縦走して、そこから北上、全山してみたら少し満足。次から無雪期には黒戸入山、光まで全山、折り返し北上、早川尾根を通り夜叉神峠下山というフルコース縦走をするようになった。それは毎回単純に同じルートを辿っているということではない。山行毎、歩の進め方を臨機応変、変えざるを得ないような多少の困難さを持っているので、何度やっても飽きない。場合によってそれでもやや不満足、もう一度折り返そうかと何度も検討したが、ルートがきれいとはいえないのでまだ試みたことはない。白峰南嶺をルートに入れればぐり一周になりスマートかと何度も考えたが、田代まで下ってはせっかくの山行が途中で切れてしまい気に入らない。

今では新しいものに向かうという喜びはなく、この反復、継続は生臭さは隠せないものの一種の修行か、長期散歩となっているかもしれない。場合により夏もなかなか苦しいが、厳冬期の全山はピクニックや散歩という軽い感じではなく、少し厳しい旅、あるいはちょっと冒険といった面白さがある。

97年以降、行政あげて観光地化に努め山旅派はめっきり減り、超高年宴会登山家が増えたが、メジャーな山域の割にはまだマシとしよう。日本に残された唯一のロングトレールを消し去

ろうとしている静岡県とそれを支持する酒宴登山家、環境ビジネス家の責任は大きい。山岳ジャーナリズムの罪も大きい。装備がよくなれば、小屋を縮小して始めて昔と同じ喜びが得られるのではないか。登山は、多少の困難さに喜びがあるはずだ。残置プロテクションを撤去すべきなのに、ボルトベタ打ちにすることを看過、支持したからだ。山岳雑誌も、クライミングにはまともな判断力、批判精神を示すが、縦走登山に関してはほとんど宴会登山家の視点に終始する。2食付きの小屋、避難小屋だらけにすることは、体力が大幅に落ちた人、酒宴を楽しみたい人の領域を増やしこそすれ、これから山を始めようとする人の挑戦の場を奪うことだ。未来のヒトにも昔ながらの山を残しておくべきだと思う。「我がなき後は、洪水よ来たれ」の浅ましさ。自分たちも若かったら、こんなゆるい、お金ばかりかかる山に行きたいとは思わないに違いない。

多くの観光地では、団体客の温泉宴会から個人中心にシフトしているのとは逆に、登山では集団宴会山行が盛んだ。今時、若い人や中年でも集団宴会登山には辟易としている。宴会集団ばかりが跋扈する山へ若者が行く気にならないのは当然だろう。団体客に頼った巨大温泉旅館が行き詰まっているのに、山小屋(特に、南アルプス南部)の大型化著しく、その将来は危ういとしかしいようがない。日本の少子化、高齢化のペース以上に登山者の少子化、高齢化著しく、その絶滅は近い。

古くからの南アルプス南部入山口のとある駅には、今でも「下伊那山岳遭難防止対策協会」名にて、(増補注：この看板は07年撤去。485頁参照。)「一、食料は必ず自分で持ちましょう…」という古びた看板が掲げられている。日本の小さな山岳エリアで、山小屋(の食事)を頼っていては、それは登山ではなくピクニックである。ピクニックの領域として認識されているから、本来の遭難とはいえない遭難事故が増え、安易に携帯電話による救助要請が出されるのであり、それを発信した彼らを批判するのは厳しすぎる対応だ。その咎の殆どは多額の公金を使い、道や小屋を整備した行政が負うべきものだろう。おまけに、地域が潤うのではなく関係者、土建業者が儲かるだけだ。交通アクセス整備のため、その村は通過地点の一つになり閑古鳥が鳴いている。

速さ、高さ、強さが明確に分かるのがスポーツであり、だから面白い。しかし登山は、あまりに気象条件等に影響され、危険でもあるので純粋なスポーツとはいえない。その昔のソ連の岩登り競技会、現在のXゲームのような純粋に速度を競うものは、気象条件、危険という要素を抜いたものだからスポーツだろう。ヘルメットをかぶらないフリークライミングもそれに近い。それは、技術を純粋に抽出したものだから、ある面ではより高度な基本的技術でもある。山野井泰史と平山ユージの対談(「頂上の実感」、『岳人』、03年1月号、66～73頁)がすっきり噛み合わないのは当然だ。山岳耐久レースも無雪期であればスポーツに近いだろう。

スポーツでは公平性を保つため使用するギアは厳しく制限されるが、普通の登山では何を

使ってもよい。衣類も装備も昔に比べはるかに高性能だ。ただ自分の足で移動すればよいだけだから、山小屋ができ、食事付き宿泊ができるようになり登山のすそ野は広がる。それはアメリカンエイドのルートにボルトをべた打ちしたようなものだ。ヒマラヤの冬壁を初登攀しても、その気象条件、登攀スタイルが異なれば単純な比較は出来ない。どうしても明瞭性が不足するから、スポーツとしてはきちんと確立出来ない。

日本の地形なら、少なくとも森林限界以上の小屋の食事は自前、水の導水やポンプアップの禁止、避難小屋では食品を売ったり寝具を貸したりしない程度の制限を設けなくては、ルールも使用する道具の制約もないスポーツになってしまう。それではゲームにならず面白くない。スポーツなら、ギアの進歩があってもそれを誰でも平等に使うことができれば、記録が底上げされるだけで面白さは変わらない。しかし、進歩した道具を使っている上に、小屋を整備してはゲームの底辺は広がっても山が小さすぎて楽しくない。3万人出場するというマラソン大会では、持ちタイムのよい順に出発することでレースになるが、全て同一条件でスタートしたらレースにはならない。もちろん登山はレースではないが、味噌も糞（何が味噌で何が糞と言うことではなく、例えとして）も一緒に行政と癒着した土木建設業者、山小屋運営者、酒宴登山家が楽しめるだけだ。サッカーのコートがテニスコートの大きさになり、ゴールネットが巨大になったにもかかわらず11人制、その上足を使わず手でプレーするサッカーにすればサッカーは誰にでもできるようになるが、簡単に点が入りすぎ試合にならず全く面白くない。

北アルプス北部中心に活動する上級登山者が、息抜きに厳冬期南アルプス全山縦走に入ると、一つ一つの山の標高差の大きさ、長さそして樹林帯のルートの分かりにくさのため実力を十分発揮することができないかもしれない。森林限界が高く、雪が少ないので下手に樹林帯を通ろうとすると行き止まる。好天に恵まれることは多いが、強風、低温下での長時間行動を強いられる。北アルプス北部の本格的雪稜登山に慣れたエキスパートには、南アルプスは間延びした山歩きに感じられテンションが維持できない異質な登山、山旅であろうか。

冬の半山程度なら、降雪量が少ないため夏道が明瞭に分かったり、一度トレースができるとただラッセルの跡を辿るだけになり、夏山よりスムーズに歩け全く面白味に欠けることもある。しかし、冬の全山くらいの長さでは荒天もラッセルも強風も楽しめる。

希に見る雪の少ない天候の穏やかな99/00年、おまけに完全に出来上がったトレースを辿った冬期南アルプス全山縦走の記録を雑誌に発表した人がいる(岩瀬幹生、「厳冬期南アルプス・全山快速縦走の記録」、『山と溪谷』、04年10月号、215～217頁)。当たり前だが、この年の天候、積雪と人出は全くの例外であり、普通はもっともっと楽しめる。僥倖に恵まれたことに気づかず、南アルプスを甘く見た記録を一般化して信じると、痛い思いをしかねない。細

かなことだが、記録に記載された到着、出発時間に数カ所大きな間違いがあった。百間洞と茶臼で会った者としては解せないことだ。

ノンデポ、ノンサポート、無酸素(冗談)は必要条件だ。サポートやデポを受けた時点でせっかくの全山が半山に 1/4 山にリセットされ、それに加え携帯で連絡しては限りなく家にいることに近くなる。家から離れることにこそ旅や登山の面白みの原点があるはずだ。たとえ自分独力ではできないことでも、物量作戦で強引に成就するのはスマートとは思えないし、より力のある人のための挑戦の場をできるだけきれいな状態で残しておく謙虚さが必要と思う。現在の装備、食料、情報を使う限りノンデポ、ノンサポートという制約を付けなければ山が小さすぎ全くつまらない。昔の人の何百分の一も楽しんでいないのではないだろうか。70 年以上前に発行されたガイドブック(渡辺公平、細井吉造、山下一夫、『南アルプス』、三省堂、35 年)を見ても、当時の人の方がずっと南アルプスを歩き楽しんでいたように思える。

ところで長期とは日々の生活が日常になる、例えば爪を切る必要がある等、新たな日常が感じられるくらいの長さをいう。少なくとも心と体の調子が整うのに必要な 10 日以上、夏は人が多いのでそれでも短い。頭、筋肉、内臓が新たなリズムを刻み始め、曜日と仕事を忘れリラックスできるくらいの長さだ。また、下山後にまで気を回すことができず、まず一日の行程をクリアすることしか考えられないくらいの困難さは、その長さとともに長期山行の必須要素だ。それらがなければ、気の抜けたちょっと散歩タイムの長い町のツアー旅行に外ならない。無雪期南アルプス全山縦走は明らかに短期、厳冬期南アルプス全山縦走でやっと長期といえるくらいだろう。

長期山行の欠点は、一時的でも日常社会を離れ、社会を少し突き放して見ることにより社会的矛盾に対する感受性が高まり、気楽には生きにくくなることである。現在の日本で長期休暇を取ることは反社会的、反会社的と見なされ孤立しがちになる。加藤文太郎は、70 年以上も前あれほどの山行をしているが、一体どのように会社と折り合いをつけていたのか、何時仕事をしていたのか不思議でならない。年末年始、GW、お盆にせいぜい一週間の休暇があるだけの日本的集団主義は、企業活動の効率化には具合がよさそう。そのような時には医師まで休暇を取っていて、まともな治療は受けられないこともあるという。土日もしかり。登山は休みの時にすることが多いので、絶対怪我などしないように注意する必要があるとは悲しい現実だ。

江戸時代には、伊勢参りだけでも年間 100 万人が訪れていた。移動の手段はほぼ全て歩きだから、江戸から片道 2 週間かかったと考えると、現在の休暇の短さは日本の伝統ではな

さそうだ。今では考えられないような長期休暇を取っている。湯治を目的に長期滞在する温泉地、湯治場の多さを考えてもよく分かる。湯治は2～3週間が普通だったはずだ。

連休を多くすれば「経済波及効果がある」との名目で、祝日を月曜日に移し3連休にするいわゆるハッピーマンデー法は、貧しい有給休暇制度を糊塗し固定しようとするものだ。2000年から「成人の日」、「体育の日」が、2003年からは「海の日」、「敬老の日」も月曜日に移された。それでは何のための祝日だろう。誕生日も月曜にしたり、「正月」、「天皇誕生日」、「春分の日」、「秋分の日」もそうするなら面白い。また昭和天皇の誕生日を今も「みどりの日」として残すなら、何百年後かには「天皇誕生日」だらけになってしまいそうだ。現在の「天皇誕生日」は、A級戦犯が処刑された日だ。04年から5月4日が休日になり、07年からは4月29日の「みどりの日」が「昭和の日」に、5月4日の休日が「みどりの日」になった。「建国の日」は66年、「元号法」は78年制定され、天皇と昭和を祝福しているかのような祝日ばかりのこの国は、一体、敗戦国なのか戦勝国なのかさっぱり分からない。

GW等と浮かれず、「みどりの日」は返上し、せめて国際標準のILO132号条約を批准して連続2週間の休暇を自由な権利として取れるようにすべきだろう。道路も鉄道も宿も、特定の休祝日にだけ人が集中して、他の日は閑古鳥の鳴くような不合理はなくなり、たとえ多少生産性が落ち給料が下がったとしても、個人としてはより豊かな社会が実現されたことになり、結果として「経済波及効果がある」はずだ。現在の集中管理的手法は、ただ3連休の混雑をひどくするだけの時代錯誤に外ならない。労働者の権利を守るべき法律も、全て企業側に有利に運営され、会社あっての、国あっての個人と、基本的人権にプライオリティーがおかれぬ国では当然だ。近代国家の憲法は、国民の人権を守るために権力を制限するという思想の元で作られている。それは「国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない」のにもかかわらず、「おまかせ」した国民への当然の報いであろう。かといって強いリーダーを求めることは奴隷になることである。公"public"とは、個人の上に君臨して支配するものではなく、社会の全構成員が、それぞれお互い個人の権利を最大限保証するために作られた、約束の総体のようなものだ。しかし、相変わらず、公とは「大宅」であるから、個人は公権力の執行機関つまり官の専制的命に従い国家に対し一方的な義務を果たして当然という封建的考えが保守系政治家等から表明され、国民も自らの権利を守る秩序、公"public"を作る努力を怠っている。民主主義は面倒なシステムだから、すぐ足下をすくわれる。

04年11月、自民党の憲法改正大綱では、国民に多くの責務を課していた。例えば、「家庭の保護」が責務とされているので、きっと単身赴任やサービス残業は禁止されることになる。有り難いことだ。不思議なことに、すぐこの大綱は自民党のホームページから消え、05年10月28日「新憲法草案」が公表されたが、憲法は権力者を縛るのではなく、国民を縛るという

理念は相変わらず封建時代そのままの発想だ。「忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」を生じさせる封建的パラドックスを明記して、資本主義的、自由と民主主義とは不釣り合いで破綻している。

遭難などしたら袋叩きだ。遊んでいるだけで迷惑をかけているのに、その上トラブルを起こせば非国民ということだろう。92年「たか号」遭難の時、ラフトの上で生死をさまよっていたにもかかわらず、海上自衛隊や海上保安庁ではなく米軍に救助されたいと話していたという。米軍であれば英雄として扱われ、日本だったら大目玉というのだ(佐野三治、『たった一人の生還』、新潮文庫、95年、124頁)。山はもっと悲惨である。救助は無料とは限らず専門の救助ヘリコプター会社まで設立されている。自力下山、自力救助という山の原則を当てはめれば、ヨットも山と同様の遊びだから公の救助に頼るべきではない。行楽に行って車の事故でけがをしたら、親族か民間の救急車を呼ばなければならない。どちらがおかしいのだろうか。

ところで、04年4月に起こった、イラクの日本人人質事件に対する政府の対応は、日本という国の為政者が、国家を国民をどのように考えているか如実に示した。首相始め何人もの代議士が次々に人質になった人に対し、国に迷惑をかけた行為と批判し彼らの「自己責任」を声高に唱え、国家の邦人保護の責任をはぐらかし救出費用を負担させたばかりか、罪人の市中引き回しのようにして日本に強制帰国させた。「反政府、反日的分子」といった代議士もいた。そのなかでも特に、山での自己責任と同じと発言した代議士が多く見られたのが興味深い。それには多くの市民が賛同し、せいぜい人質になった人は山で遭難した人とは違うという意見が良識的な方だった。ある有名登山家が、人質になった人も山と同様の自己責任があると発言したのは、抜け駆けを許さないムラ社会の足の引っ張り合いのように醜かった。自民党から出馬要請されるわけだ。多くの国民が"anyone"に起こったことが"everyone"に起こりうるという想像力を持たず、人質バッシングしたのは相も変わらぬムラ社会の村八分的心性であった。「自己責任」を厳密に考えれば、国家の存在否定である。近い将来、救急車も消防車もパトカーも有料になる。少なくとも、飲酒運転、前方不注意、スピード違反等いささかでも本人に非があったり、世間や国に迷惑をかけた場合は有料になる。ヨットの遭難で、海上保安庁や自衛隊が出動しても同様である。にもかかわらず、なぜ治安が悪くなったとして警察だけ増殖させるのか。彼らの論理によれば、個人の安全は自己責任において警備会社と契約して守るのが当然である。登山ではそのことが先進的に行われ、より完璧になりつつある。

それに引き替え、パウエル國務長官のインタビューにおけるコメントはしたたかだった。人質になった人や、派遣された自衛隊員を誇りに思うべきであり「あなたは危険を冒した。それは

あなたの責任だ。」といえないばかりか、彼らを救うためにあらゆることをする義務があるというように述べている(Secretary Colin L.Powell,"Interview of Tokyo Broadcasting System International with Shigemori Kanehira",U.S.Department of State,Washington DC, Apr.15,04, <http://www.state.gov/secretary/former/powell/remarks/31489.htm>)。どさくさ紛れに自衛隊派遣さえ正当化してしまったのは、日本の政治家には考えられないくらいの手強さだ。この国では、自己否定、国家否定ともいえる政治家の暴言さえ「自己責任」を問われない。嫉妬深く生け贄に飢えている多くの国民は、人質に対し自ら受けている「抑圧の移譲」(丸山真男、『増補版 現代政治の思想と行動』、未来社、65年、25頁)してストレスを発散するとは、割れ鍋に綴じ蓋だ。

さすがにこの事件以後、イラクで人質になった人に対しては、その家族が積極的に政府に対し救出を要請せず、ほぼ世間を騒がせたことへの謝罪に終始したことからか、声高に「自己責任」を問うような声は少なくなった。04年10月起こったイラクの人質事件の時には町村信孝外相が「自衛隊とも日本政府とも全く関係ない純粋な民間人」と、開放を求める声明を出したが、彼は数日後に殺害された。日本国籍を持っている人は誰でも日本の一員と考えられて当然だろう。しかし、なぜ「全く関係ない」と政府の責任を逃げ、個人は都合により国家から見捨てられる存在であると、政府を代表して発言したのだろう。これでは、国家は個人とは無関係、不要かつ害になることがあることを証明したようなものだ。本来は「日本人を殺すな」といわなければ、国民の国家への忠誠など望めたものではないはずだ。国家主義の政治家に限り、個人にとって国家は不要であり、国家にとって個人の命は鴻毛のように軽いと明言しているのは、倒錯した論理としか考えられない。05年5月9日、イラクで拘束されたという日本人の弟は、翌日の記者会見で「政府が揺らがないことを希望します」と述べていたが、全くその心配はない。

確かに登山は、個人が文明の保護の外に半歩出て直接的に自然と向き合うことにより、本質的な生きる力を喚起するものかもしれない。冬山で多少不便な生活が続いていると、下山後、文化生活の有り難さは身にしみ、心地よく、とろけるような快感を味わう。雪を溶かした水ばかり飲んでいると、山から下り林道脇から流れる沢水を飲んでも、誇張でなく甘露のようにとろろとしてネクタルの如し。しかし、しばらくで何となくもの足らなく感じ始める。生きている実感がないのだ。なんて罰当たりか。生きている実感は、自分の思いどおりいくことでも、単純に気持ちいいことでもない。自分と他者との齟齬がなく、何でも意のままになる快適な世界なら、自分自身を意識すら出来ないはずだ。自分を自分として意識できるのは、自分の意志が及ばない対照あつてのことだろう。何でも思いのままになり快適なら、刺激がなく、ただ寝ているだけだ。覚醒していることはストレスあつてのこと。しかし、文化的生活のストレスは、実体がはっきりしない他者

との心理戦に終止する嫌いがある。その点、登山はシンプルかつ肉体的に直接、自然と対峙できる。生きている以上、肉体の存在の上にのみ人間の意識があるはずだ。始めに脳ありきではない。スポーツもいいが、それは肉体的ではあるが、やはり他者との関係の上に成り立つ間接的なものだ。かける時間も短い。長期縦走は、長時間、何日も何日も、単純に自然の不安、不快と折り合いを付け生きるだけの行為だ。だからこそ、自然が微笑んだ時は文化生活では得られない直截的な気分の爽快感を感じる。それら快、不快との対峙の中に、生きている実感があると思う。文化生活は、生きる実感が阻害された安楽で心地よいだけの生存かもしれない。

時間の問題以上に普通の社会生活と折り合いが悪くなる。歩き、食べ、寝るだけという単純でヒトの本源的生活に近い日々は、日常生活の対極にあるからだ。煩雑で何もかもが間接的な日常生活は、何て無意味で無感動なものかと感じるようになってしまう。それでも、どちらかを選べと言われたら、文化生活を選択するが、特に冬山後に顕著。そこでまた山に入るという悪循環は、日本にいながらグローバルスタンダード的な休みを取る、取ろうとするストレスからもたらされているとすれば本末転倒でも、クリエイティブな仕事をするために必要な休暇と考えたい。

年齢的には 20 台前半くらいまでなら、まだ仕事など社会的にも確立しておらず、そのような体験をしてもリカバーする時間もあり、よい思い出とすることができる。リタイア後の年齢であればびったりな行為だろう。どちらの年代の場合もよい経験をしたというレベルで、ほとんど人生を乱しもしないが、中間的年代には向かないかもしれない。人生の一つのエピソード、単なる慰安行為というのであれば、山にこだわる必要はない。しかし、人生の多くの時間とリスクをかけているものの中には、強く人の価値観が反映されているに違いない。そしてその中こそ生きる意味、大きな喜びがあるはずだ。現状の中での安定を保険にした犠牲の少ない行為から得られるものは思いの外小さいと思う。時々、そんなに長い休みがよく取れるね、と嫉妬と虚栄心混じりの反応をされることがある。もちろん、長期縦走唯一の冒険は休暇取得である。あなたが言外にいったように誰でも簡単にできることだから、皮肉をいって強がる前にやりたいと思えば我々のように犠牲をいとわず休暇を取って、是非楽しんで欲しい。嫌みをいって溜飲を下げひねくれているのは、せっかく山に来て面白くないのではないか。大した連続休暇もなく生産性を維持できる仕事は少なくとも創造的でないか、判断力が不要なものだ。あるいは、その人が余程のパワーを持っている証左であろう。

モバイルでいつも社会とつながった仮想現実的な冒険ビジネスを目にすることも多い。川口浩探検隊の IT バージョン、あるいは電波少年、猿岩石のアウトドア版だ。行動を直ちに報道することは、臨場感を与え視聴者の共感を得ることかもしれないが、行動主体の行動はそれ

に影響され、自分が主体的に行動するのではなく無意識で期待されるように行動するようになるから、それは一種のバーチャルといってよいだろう。

予定調和、仮想現実の世界は行動主体にとって全てお釈迦様(例えば、マスコミ)の手の平の上での出来事、家の中でリアルな 3D ゲームに興ずることに近い。そのような冒険ビジネスには辟易だ。自ら創作し視聴者をあおり、予定されたイメージを忠実に演じることがそれほど楽しいのだろうか。当然、そのような状況で一旦トラブルが起これば、大々的なサポート体勢で救出される(運悪く亡くなる人もいるが)。個人がほとんどリスクを負わない行為はバーチャル以外の何ものでもない。マスコミに名を売ることを自分が主体的に生きる証明と考えている人が多い。それで名を売って将来の、現在の冒険(学校)ビジネスを成功させたいのかもしれない。しかし、勝手に誰にも知られずに消え去ることも可能ということが本来の自由、主体的行動。文明に依存しすぎない自立した冒険だ。

報道しない、営業しなくても、携帯電話で常に社会とつながっている行動も不自然、不自由な感じがする。その昔は、ポケベルを持たされ呼び出されるサラリーマンを見て奴隷のようでかわいそうに思ったものだ。そのような身分には絶対なるまいと誓ったが、今では自ら好んで携帯を持つ人が多い。孫悟空の才なき者への緊箍は^{きんこ}ロボトミーに他ならない。携帯は一種の緊箍だ。『1984 年』(オーウェル、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、72 年)では、身分の高い者はテレスコープを切る、つまり真理省により常に改竄される歴史と現状そして大量のプロパガンダ情報を切断すること、監視盗聴装置をオフにすることが許されている。なかなか示唆に富んだ設定だ。確かに携帯はそのような一方的なものではないが、居間のカウチでくつろいでいるように人を拘束し依存させる道具でもある。便利さは、個人の気ままな主体的行動を許さない息苦しさとバーターされたものかもしれない。

『自由からの逃走』(エーリッヒ・フロム、日高六郎訳、東京創元社、65 年)して、服従することによって幸福を感じるマゾヒストが多くなったようだ。電子の鎖でどこでも社会につながれている人は、へその緒につながれたまま自立できない人と同じではないだろうか。そしてその呪縛を断ち切ることから山登りの楽しみが始まると思う。アウトドアに出る意味だ。他に依存することが少ない行為であればあるほど、大きな喜びが得られるはずだ。「書を捨て町へ出よう」、「携帯を捨て山へ出よう」。